



日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 1 号 / Boletín Núm. 1

2000 年 12 月 1 日 / 1 de diciembre de 2000

事務局

〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9

日本学会事務センター

Tel: 03-5814-5801 Fax: 03-5814-5820

ホームページ: <http://www.nanzan-u.ac.jp/HISPANIA/>

編集局

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6

京都外国語大学イスパニア語学科(坂東研究室)

Tel: 075-322-6121 Fax: 075-322-6246

挨拶

桑名 一博

(会長)

このたび日本イスパニヤ学会が、学会誌である<HISPÁNICA>に加えて、新たに『会報』を発行することになったことをまずは喜びたい。

顧みれば、本学会の前身である日本イスパニヤ語学会が創立されたのが 1955 年であるから、学会の歴史も半世紀を数えようとしている。学会発足当時、専攻の学科を有する大学は僅か三大学のみで、第二外国語としてスペイン語を教えている大学も多くはなかった。従って、会員数もせいぜい二・三十人程度で、聞くところによれば、それぞれの会員が応分の寄付をして学会の創立に漕ぎつけたという。

その後、上智大学を初めとして、特に 1960 年代には、スペイン語を専攻する学科の新設が相次いだほか、数多くの大学でスペイン語が第二外国語として開講されるようになった。更に同じ 60 年代の後半になると、幾つかの大学に大学院が設けられたこともあって、研究者の数は飛躍的に増大し、今や会員数も有に 300 人を超えるまでに至っている。

学会の創立を追うようにして起きた、スペイン語やスペイン語圏の文化に対する関心の高まりは、研究者のポストや著作刊行の機会の増加につながり、学会発展のための追い風になったのは確かである。だがその反面、それがあまりにも急激であったため、対応に追われ過ぎ、考えるべき問題も見逃がしてきたのではないかという不安も抱かざるをえない。

わが国でスペイン語圏の文化に対する関心が高まってきた 60 年代はまた、従来の人文科学研究に対する根元的な批判が始まった時期でもある。そして 80 年代の後半にはアメリカの近代語協会の会長が、今後の語学・文学研究の変化に対して関係者の注意を喚起している。

『会報』が知らせてくれるであろう数多くのニュースのなかに、時には、根本的な問題を考えるヒントも与えてくれればと願っている次第である。

サラマンカ大学日西センター

林屋 永吉
(副会長)

サラマンカ大学のセントロ・イスパノ・ハポネスで開かれている市民のための日本語教室をこの 3 月に参観し、その盛況ぶりと生徒達の熱意の程にすっかり驚いた。市民講座を始めると聞いて、元々一般のスペイン人は外国語の習得にあまり熱心ではないから、文字まで異なる言葉の学習に挑むような人は少ないのではないかと惧れていた。ところが、申込者はたちまち 60 名に達し、大人 3 クラス、子供 1 クラスが編成され、しかも脱落者も少ないと知って安心した。

このセントロは、サラマンカ大学がブラサ・マヨールのすぐ近くに所有する 16 世紀の建物で歴史建造物にも指定されているサン・ボアル宮を改修し、その正面にあたる 3 分の 1 の部分に設けたもので、アントニオ・ロベス前副学長を長とする大学の機関として、昨、1999 年 3 月に開館し、同年 10 月から活動を始めている。

大学がこのような施設の設置を発案したのは 1995 年の初めのことで、天皇皇后両陛下が 94 年、御即位後初めてスペインを公式訪問された際に、再度この町を訪問されて（前回は 1985 年に皇太子、同妃として）、大学へも重ねておいでになったことがその導因となっている。

もともと、スペインにおける日本語および日本研究は、欧州の主要諸国のそれと比べても著しく遅れをとっており、かねてから両国の識者からもそれが指摘されていた。戦前から日本人留学生に親しまれてきたこの大学としても、その改善の必要性をかねてより認識していたことでもあったので、両陛下の御訪西の機に大いに盛り上がった市民および学内の親日感情と対日関心に応じて今回のセンター設置となったのである。それを物語って、セントロの図書館には両陛下のにこやかなお写真が掲げられ、中央サロンには「アウラ・マグナ・ラ・エンペラトリス・ミチコ」と記した石板が壁に付されている。

大学は、セントロの開設に先立ち、96 年に取りあえず日本語の授業を選択科目として開始し、現在も約 50 名の学生が受講しているが、セントロ開設と同時にスペイン人の日本研究者による日本文化の授業をも実施し、近い将来には日本語及び日本文化学科を創設したいとしている。大学はこのセントロをその拠点とすると同時に、日本との知的交流・日本人留学生と市民及び学生達との交歓を含めて、地域社会に対する日本文化の紹介の場にもしたい考えで、既に前記市民講座をはじめ、日本の文化や事情に関するシンポジウム、講演会、展覧会等を、日本大使館の協力も得て行っている。

この大学の要請に基づき、本邦ではその活動を支援するため、97 年 12 月、日本サラマンカ大学友の会が設立されたが、同会ではセントロの開館準備期より、秘書役 1 名（現在市民講座にも積極的に協力している）を派遣しているほか、集中講義を行うための講師の派遣を大学と協議の上で実施している。

その第一回は本年 3 月、日本の政治、経済、文化（演劇）の 3 科目につき、松下洋、細野昭雄、田尻陽一各教授に、それぞれ 20 時間、スペイン語で授業していただいた。受講者は予想をはるかに上回って、各講義とも 110 名に達し、急遽教室を講堂に移したほどであった。この好評に応じて同会としてはこれを継続すべく、すでに 2001 年度の講義科目と講師を確定し、2002 年についても目下、大

学と協議中である。

なお、同会は現在本邦の 9 大学と 7 企業（内 3 企業はスペイン）の法人会員と 145 名の個人会員の会費収入、及び 3 団体からの寄付と 1 企業の事務所提供によって運営しており、全員がボランティアで活動している。

また、前記のサン・ボアール宮の改修工事にあたっては、その費用総額 3 億 5000 ペセタの 3 分の 1 の 1 億 2500 万ペセタ（当時 9500 万円）が、万博基金と 40 社の日本企業の寄付でまかなわれた。

このように多くの人々の好意と尽力によって誕生したこのセントロが立派に育ち、スペインにおける日本語および日本文化の教育および研究が一日も早く主要欧州諸国のレベルに達することを祈念している。

第 46 回大会報告

於東京大学（駒場校舎）

2000 年度第 46 回大会は下記の要領で開催されました。

日時：10 月 28 日（土）～29 日（日）

- 総会：（1）事業報告
（2）1999 年度決算報告
（3）1999 年度監査報告
（4）学会誌編集委員報告
（5）会報編集委員報告

研究発表（28 日）

《言語》

- （1）福畠教隆：「aunque に導かれる叙法について」
- （2）木村琢也：「"Buénor días."」
- （3）Pilar Lago Mediante: "Teorías acerca de las mezclas lingüísticas aplicadas a una niña bilingüe en español-japonés"
- （4）仲井邦佳：「El mismo...que, otro...que は比較構文か？ —その位置づけをめぐって—」
- （5）高松英樹：「スペイン語における不定詞省略の生起環境について」

《文学・文化》

- （1）井上幸孝：「16 世紀後半のヌエバ・エスパーニャにおけるメスティソ —ポマールとカマルゴの事例—」
- （2）Alfredo López-Pasarín Basabe: "Jon Juaristi y los últimos años de poesía en español"
- （3）中井博康：「泉の寓意／寓意の泉 —ソル・フアナ『神聖なるナルシソ』論—」
- （4）太田靖子：「ホセ・ファン・タブラーダの第二ハイカイ集『花壺』についての一考察 —disociaciones líricas とは何か—」

研究発表 (29 日)

《言語》

- (1) 二宮 哲 : 「"Un árbol torcido nunca se endereza"」
- (2) 西村君代 : 「スペイン語縮小辞の通所的分析」
- (3) 上田博人 : 「スペイン語の多人数教室の授業とマルチメディア教材の利用」

《文学》

- (1) 佐藤佐知 : 「Ana María Matute の作品における空間描写の象徴性 — Olvidado Rey Gudú (1996)—」
- (2) 牛島信明 : 「セルバンテスとボルヘスの合言葉 —不信の中断 (コールリッジ) —」

特別講演 : 島田雅彦氏 (作家) : 「16 世紀アジアの海へ」 (参加者 : 約 90 名)

2000 年度理事会

2000 年度理事会は下記の要領で開催されました。

第 1 回

日時 : 5 月 28 日 (日) 13 : 00 ~ 15 : 50

場所 : モンブランホテル (名古屋駅前)

議事 :

1. 前回議事録を承認

2. 審議事項

- (1) 会員 11 名の退会と 3 名の新会員を承認
- (2) 1999 年度会計決算報告を承認
- (3) 2000 年度第 46 回大会の開催および研究発表応募要領を審議決定
- (4) 会計委員・庶務委員・学会誌編集委員の選出
- (5) 2001 年度大会会場校を天理大学に決定
- (6) 会則第 2 章第 4 条 2 ~ 4 項に則り、ホームページ作成と会報の発行を承認
- (7) 会則第 4 章第 8 条 4 項に則り、広報委員会を設置、委員を選出
- (8) 学会用ロゴマークの公募を承認
- (9) 学会誌 44 号から学会記事、理事会、開催記録、大会プログラム、学会役員一覧などを記載することを決定
- (10) 大会で特別講演の開催を決定

第 2 回

日時：9月24日（日）13：00～15：40

場所：モンブランホテル（名古屋駅前）

議事：

1. 前回議事録を承認
2. 審議事項
 - (1) 会員2名の退会と7名の新会員の承認
 - (2) 次回大会での特別講演の講師は島田雅彦氏（作家）に決定
 - (3) 学会誌編集委員長に野谷文昭委員を選出
 - (4) 学会誌への応募論文の査読制度の設置および論文1点につき査読者2名とすることを承認
 - (5) 次回大会のプログラムの審議と承認
 - (6) 日本学術会議からの依頼によって第18期第1部世話担当研究連絡委員会の委員候補に小林一宏会員を推薦することとした
 - (7) 学会用ロゴマークの公募に5万円の謝礼金を付けることを承認
 - (8) 会場校の依頼については今後は地域にこだわらずに適宜決定することとした

第 3 回

日時：10月28日（土）11：00～12：45

場所：東京大学（駒場校舎）

議事：

1. 前回議事録を承認
2. 審議事項
 - (1) 1名の新会員と4名の賛助会員の承認
 - (2) 2001年度第47回大会の下記開催要領を承認：
日時：10月27日（土）～28日（日）
場所：天理大学
 - (3) 学会用ロゴマークと会報用の表題を決定
 - (4) 2001年度予算を承認
 - (5) 学会誌の書評欄の充実をはかる

2000 年度役員一覧

1. 会 長 桑名一博

2. 副会長 林屋永吉

3. 理事長 小林一宏

4. 理 事 東日本（ABC 順）

* 原 誠

小林一宏

* 本田誠二

小池和良

* 野谷文昭

杉山 晃

* 高山智博

高垣敏博

* 上田博人

牛島信明

西日本（ABC 順）

* 有本紀明

堀内研二

* 坂東省次

伊藤太吾

* 出口厚美

宮本正美

* 福寫教隆

高橋覚二

* 木下 登

（欠員）

* は 2000 年度選出理事

5. 会計 小池和良

6. 監査 藤田一成 長谷川信弥

7. 庶務 竹村文彦（大会担当） 三角明子（理事長任命）

8. 学会誌編集委員会 文学：有本紀明 言語：福寫教隆 文化：木下 登
* 野谷文昭 上田博人 大高保二郎

9. 広報委員会 坂東省次 木下 登 * 高橋覚二

* は委員長

日本イスパニヤ学会第46回大会（於東大駒場） 会計報告

教室借用代金	46,215	円	
水道料	1,696		
28日昼食代	44,520		(理事用: 2,000円×19 大会組織委員用: 880円×5 消費税: 2,120円)
29日昼食代	7,392		(大会組織委員用: 880円 × 8 + 352円)
休憩室用雑貨 (1)	9,879		(コーヒー、紅茶、緑茶、クリープ、砂糖、 スプーン、紙コップ、ごみ袋)
休憩室用雑貨 (2)	6,213		(菓子類、紙ナプキン、ぞうきん、大皿、 マジック、ミネラルウォーター)
休憩室用雑貨 (3)	3,364		(29日追加分の菓子類)
ネームプレート・領収書	6,846		(80円×80 + 120円 + 326円)
コピー用紙	1,984		(B4・B5: 500枚、A4: 1000枚)
官製はがき代	18,700		(50円×374)
はがき印刷代	11,781		(チヨダクレス社に依頼)
学生アルバイト代	63,900		(時給: 900円 × のべ時間: 71) (71時間の内訳: 学生A: 16、学生B: 16 学生C: 14、学生D: 11、学生E: 8 学生F: 3、学生G: 3)
島田雅彦氏講演謝礼	50,000		

◎支出総額 27,2490 円

《懇親会関連》

収入の部	6,500 × 88 =	<u>572,000</u> 円
支出の部		
洋食	5,000 × 45 =	225,000
和食	5,000 × 40 =	200,000
飲み放題	1,400 × 85 =	119,000
ワイン	2,000 × 14 =	28,000
マイク	1,000 × 2 =	2,000
サービス料		3,000
消費税		28,850

◎支出総額 605,850 円

○不足分(33,850円)については、書店8社よりいただいたご祝儀(78,000円)より充当。

2000年3月31日決算

日本イスパニヤ学会
1999年度会計報告

2000年10月28日

1999年4月1日～2000年3月31日

収入(単位は円)

支出(単位は円)

正会員会費	1,480,000
賛助会員会費	375,000
前受会費	15,000
BACK NO 収入	22,800
郵便貯金利息	330,834
銀行預金利子	366
1998年度より繰越金	1,123,506
1998年度より繰越金(預り金)	760,400

学会事務センター事務経費(1)	583,275
学会事務センター事務経費(2)	374,600
学会事務センター業務委託費用	331,674
学会誌発行経費	997,500
大会運営費	50,000
理事会開催費	94,770
通信費	146,380
手数料	2,782
消耗品	13,506
庶務委員経費	60,000
保管料	78,120
備品費	18,207
その他	1,260

現在残高内訳	単位円
学会事務センター預り金	946,926
三和銀行普通預金	405,772
現金	3,134
合計	1,355,832

収入(繰越金含む)合計 4,107,906

支出合計 2,752,074

現在残高(収入合計-支出合計)

1,355,832

会計委員 小池和良



会計監査の結果異常なきものと認めます。

2000年7月25日

監査委員 藤田一成

2000年10月28日

監査委員 長谷川信弥



2000年10月28日

日本イスパニヤ学会
2001年度会計予算案

収入		
会費 (8000円×360名)	2,880,000円	
支出		
		(昨年度の数字)
1. イスパニカ発行経費	1,000,000円	(997,500円)
2. 大会開催費用	300,000円	(50,000円)
3. 学会事務センター業務委託費用	400,000円	(331,674円)
4. 学会事務センター事務経費	400,000円	(374,600円)
5. 庶務委員経費	60,000円	(60,000円)
6. 理事会開催費用	140,000円	(94,770円)
7. 保管料	80,000円	(78,120円)
8. その他	200,000円	(182,135円)
合計	2,580,000円	(2,168,799円)
収支差額 300,000円		

注1. 学会事務センター事務経費：会費請求書/会報/イスパニカ発行郵税・コピー代・事務通信費等。

その他：編集作業に伴う郵便料金・事務センターに依頼しない郵便料金・コピー代・送金手数料・消耗品等。

注2. 会計簿上の昨年度の支出は2,752,074円ですが、内583,275円は実際には1998年度の費用ですので、昨年度の数字はこれを引いた額2,168,799円になっています。

作成
会計委員 小池和良

【新刊紹介】

ロドリゴ・レイローサ著 『船の救世主』 (杉山晃・訳 現代企画室 2000年)

本書の読者は、冒頭より映像上のシーンをイメージしながら、講読を進めていくことになる。つまり、作品全体 I~XIII の 13 章を大きなシークエンスとしたまるで映画のシナリオのように考えると面白いだろう。同様の文体で聞こえる '97 年直木賞浅田次郎は、スクリーンの二次元性を説き、執筆時はあくまで文字を大切にしたい映像におもねることのない創作態度を意識しているようだが、このグアテマラ人作家の小説作法はどのようであろうか？

加えて、"傾(かし)いだココヤシ"(I)、"揺れの激しい飛行だったが嵐に追いかけられるように飛んだ"(II)、"嵐との競争に勝ちました"(III)、"風に揺れる葉音のようなざわめきが聞こえた"(IV)、"木々の梢はそよ風を受けて静かに揺れ"(V)などしなやかな文体(訳者の尽力でもあろう)が目立ち、著者の瑞々しい感性が表現されている。濃淡のある自然描写は、南米のセルバンテスと謳われるガルシア＝マルケスの『予告された殺人の記録』(1981)のどこか気だるような情景を彷彿とさせるが、思えば両作家には、ともに映画作品への強い憧れがあることも共通している。

本小説(1992)を貫く大きなテーマは、訳者の解説にもあるとおり、「狂気」であり、中心人物オールドニエス海軍大將は、異邦人＝謎の男＝抽象世界の男＝架空の男の存在との「対話」や空耳に翻弄され、その葛藤に苦悩する。

大將の狂氣的言動をとおして示唆されるのは、「ある世界でプラスの要素は、別の世界でマイナスで有り得た」(II)、「否定はしなかったが、肯定するのともめられた」(VI)とする両義性であり、「排泄物を取り込んで、口から食物を出すように」(II)、「染みが滲んで紙から盛り上がり、自分を呑み込もうとしていた」(III)とする逆転の論理である。「狂人」のスーパースターが大活躍する『ドン・キホーテ』でも、読みの両義性・多義性、それに逆(さか)しまの発想＝価値転換が主題であったことに留意したい。

「午前中の検査の折りにインクがなくなったことや、そのあとのやり直しでインクが飛び散ったのもうそだと告白した。(中略)図書館であった謎の人物が、午後になって家に訪ねてきたといった」(VI)との大將の発言には、自己分析的でありながらも不条理な状況に呑み込まれている、つまり、内実を語る告白と奇異で不可避な現実との併存が象徴されている。

主治医フェルナンド博士の私生活、使用人(運転手)レミヒオの交通事故の真偽、そして大団円でポセ博士ならびに海軍中將爆死の真相に代表される表裏の二重性は、後年『その時は殺され・・・』(1997)で、"原罪のような軍"の構造的脅威として顕在化する。これは、ペルーを代表するアンデス作家ホセ・マリア・アルゲダス(1911~69)の「深い川」(1958)での、闇の恐怖を知りすぎた少年主人公エルネストの叫びとも、どこか通底するようだ。

(天理大学・片倉充造)

【事務局から】

《会員の異動》

新入会員

1. 佐藤 佐知 東京外国語大学
[Redacted]
2. ESCANDON Arturo 立命館大学産業社会学部
[Redacted]
3. 西脇 エステラ 日本橋学館大学
[Redacted]
4. 四宮 瑞枝 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学
[Redacted]
5. 二宮 哲 東京外国語大学
[Redacted]
6. 堀 由美
[Redacted]
7. 鈴木 恵美子 東京外国語大学大学院
[Redacted]
8. CRAVIOTO Graciela 東京外国語大学
[Redacted]
9. YOLDI María
[Redacted]
10. 行路社 代表 楠本耕之
[Redacted]
11. (株)朝日出版社第一編集部 藤野昭雄
〒101-0065 千代田区西神田 3-3-5
tel: 03-3239-0271[内線 411] fax: 03-3239-0479
12. マナンティアル書店 イグナシオ・ソト
〒152-0035 目黒区自由が丘 2-9-24-201
tel: 03-5731-2387 fax: 03-5731-2388
13. (株)国書刊行会営業部 岸本健治
〒174-0056 板橋区志村 1-13-15
tel: 03-5970-7421 fax: 03-5970-7427

会員住所の変更

1. 飯野昭夫

2. 柳原孝敦

3. 津多孝夫

所属機関住所の変更

1. 高垣敏博 東京外国語大学
〒183-8534 府中市朝日町 3-11-1
tel:042-330-5249

退会者

神代修、利光和彦、西澤龍生、山口秀男、田中京子、URGELL Nuria

《寄贈図書》

Miguel Delibes 『エル・カミーノ』（喜多延鷹訳 彩流社 2000 年）

【編集後記】

間もなく 21 世紀。スペイン語とスペイン語圏の国々の役割はますます重要性を増すように思われます。そんな中で日本イスパニヤ学会の果たす役割もまた決して小さくはないでしょう。21 世紀を目前に控えて、学会の「会報」創刊号を会員の皆様にお届けできることは大変喜ばしいことです。今後、年 2 回の発行を予定していますが、「会報」を通じて、学会関係のさまざまな情報を会員の皆様にご案内できればと思っていますのでどうかご期待ください。（坂東省次）